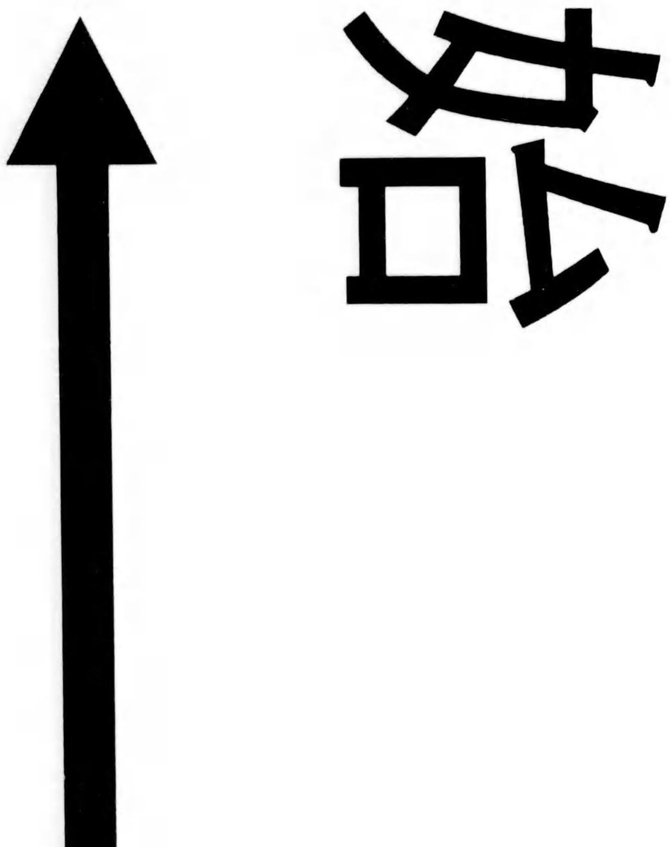
特100
577



特100—597

◆石童丸一代記和讃

月に村雲花に風。散てはかなき世の習ひ。
筑前筑後肥前肥後。大隅薩摩で六ヶ國。探
題守護を司る。文武二道に秀でたる。加藤
左衛門重氏は。娑婆の無常を悟つゝ。國に
妻子を振り捨て。諸國修行に出で給ふ。時

に御臺の千里姫。身重成しが程もなく。玉の樣なる子を產て。石童丸と申しけり。まだ見ぬ親に戀憧れ。石童十四の春の頃父は。高野に在すると。風の便りに聞しより母の御臺と手を執て。馴ぬ旅路にたどりつゝ。紀の國さして出にけり。日々にもの

憂き草枕。遂に高野の麓なる。學文路の宿にたどりつき。玉屋が茶屋に宿を取。明日は御山に登らんと。旅の勞れもうち忘れ。母は我子にうち向ひ。日頃年頃雨風に。こがれ慕ひし父上の。御顏を見も遠からず。必ずこゝろ落すなと。こゝに不憫の物語

り。宿の亭主はもれ聞て。二人の前に出で來り。申上げます旅の人。高野の山のおきてには。弘法大師の誡めに。女人は御山に登られず。聞くに御臺は驚いて。我子の袖に取り縋り。なう情なや石童よ。母は御山へ登られず。汝が御山へ登るなら。父の人

相を教ゆべし。父は人よりせい高く。左の眉毛に黑子あり。筑前訛りの人なるぞ。其を證據に尋ぬべし。言はれて石童悲みの。涙ながらに立上り。母に暇を告げながら。父を目的に高野山。杖に縋りて不動坂。登り瘁れし石童は。日も入相の暮方に。波切

不動に参りては。南無大聖の不動尊。石童
是迄参りしは。たゞ父上に逢んため。何卒
あはして下されと。最も殊勝にふし拜み。
其夜は御堂へ籠てぞ。臂を枕に笠屏風。泣
〳〵眠りし哀れさや。三更四更と夜も深て。
五更の空も明け渡り。はや寺々の曉の鐘。

夫より御堂を立出て。漸く御山へ登りけ
る。九百九十の寺々や。峯々谷々こゝかし
こ。七堂伽藍の隅々に。父の在かを尋ぬれ
ど。父かと思ふ人もなし。

◆苅萱親子対面和讃

泣〳〵参る奥の院。十八丁が其あいだ。右も

左も五輪塔。前も後も卒堵婆にて。最物す
ごき道すがら。音に名高き玉川の。無明の
橋にさし掛り。遙か向を見渡せば。苅萱道
心重氏は。圓空坊とぞ改名し。左手に花籠
たづさにて。右手に珠數をば爪繰て。光明
眞言唱つゝ。奥の院より歸る時。はからず

逢し石童と。互に親とも吾子とも。知ねば
側に寄り添て。見上げ見下す顔と顔。石童
丸の振袖と。苅萱僧の御衣の。袖と袖とが
縺れしは。親子の因縁深かりし。其時石童
苅萱の。衣の袖に取り縋り。お尋します御
僧よ。此なる御山の其内に。今道心はおは

さずや。どうぞ教て賜はれと。云れて苅萱聞くよりも。見れば幼なき一人旅。腰に差したる小脇差。某し加藤を名乗とき。拜領致せし刀なり。扨は不思議と思ども。煩惱我身に起りしと。我れと心を取り直し。石童丸に打ち向ひ。いかに若年成とても。そ

ゝうな物の尋ねよう。千萬人の御僧達。容易に尋出されまじ。若も逢んと思ふなら。八方八口に張をせよ。遥に見ゆる彼の森が。あれが御山の張札場。聞て石童涙ぐみ。哀れ御慈悲に其札を。御書被成て下されと。強て願へば苅萱は。我は途中の事ゆへ

に。筆も持たず紙もなし。我が庵室に來ならば。其札書て進ずべし。聞て石童歡んで。御連被成て下されと。願にば苅萱憐れみて。石童丸の手を引いて。草の庵に連れ來り。草鞋を脱し上にあげ。硯引寄せ筆を取り。國は何國で名は何と。國は筑前苅萱の。

文武二道に秀でたる。加藤左衞門重氏は。我父上であるなりと。名乗れば苅萱驚いて。持たる筆を取り落し。暫し涙に暮れければ。石童其と見るよりも。泣せ給は不思議なり。是は御僧何故ぞ。我父ならば片時も。早く名乗て玉へかし。云れて苅萱思ふ

よう。扨も我子か懷かしと。云んとせしが
待しばし。二度親子の名乘をば。せじとの
誓は破られず。せき來る涙を押止め。我は
父には在ね共。其苅萱と申しゝは。吾朋友
でありしかど。去年の秋の末の頃。重き病
を煩ひて。冥土の旅に出で立ぬ。斯る事を

ば露知らず。海山越て遙々と。尋ね來りし
汝をば空く歸す不憫さに。思はず涙こぼ
せしよ。聞に石童地に伏して。はつと計り
に泣沈む。漸く涙を押し拭ひ。是は誠か御
僧よ。はかなく成し上からは。定めて印は
有ならん。哀れせめては其墓を。教に下さ

れ給へかし。今道心の重氏が。涙ながらに立上り。其頃立てし新しき。石碑の前に連れ行て。是が汝の父上の。はかなくなりし其跡ぞ。云れて石童涙ぐみ。豫て用意の麻衣。其を石碑に打掛て。父上菩提と拜み上げ。斯成れしとは夢知ず。母上様と諸共に。

遙々尋ねて來りしが。母は麓に殘し置き。私し一人で是迄も。尋ね來りし折柄に。御果なされし其樣子。草葉の蔭に聞き玉へ。其に掛たる御衣は。我が姉上の御土產と。持て來りしかいも無。父の石碑を撫さすり。せめて御聲が聞たしと。袖にしぐるゝ

涙雨。現在實父の苅萱は。此くり言を聞につけ。胸張り裂ん計りにて。思はず知ず泣き沈む。漸やう涙の顔を揚げ。如何にも道理遙々と。野山を越て尋ね來て。世に無人と聞からは。名殘惜は無理もなし。とは云ひ乍是非も無。歎くは佛の爲ならず。一度

麓へ下られて。母上樣に此譯を。話して回向なし玉へ。是は御山の御開山。弘法大師の御供物。母への土產に遣さん。云れて石童嬉しげの。涙ながらに立上り。押頂ひて下ける。

◆父子師弟結約和讃

哀れなるかな母親は。我子の歸りの遲き故。行衛何所と案じられ。持病の癪に惱まされ。石童の姿は見ざるか。戀し我子や我夫と。彼方を見ては打倒れ。此方を見ては伏轉び。最後も近き御有樣。遂にはかなき憐さよ。石童それとは露知ず。玉屋が茶

屋に下り來て。草鞋を脱て足すゝぎ。奥の一間に馳り行き。襖を開き手をつかへ。母上樣よ石童が。只今歸りて參りしと。云ども呼べ共答なし。是は不思議と立寄て。樣子を見ばこゐ奈何。惣身既に冷へ渡り。石童見るより驚きて。思はず知らず聲を上

げ。前後を忘れ泣き沈む。助け給ゑや南無大師。漸く涙を押し止め。野邊の送りを營みて。形見に殘る白骨を。涙乍らに拾ひ上げ。天にも地にも便なき。父上樣には生き別れ。母上樣には死に別れ。心細くも只だ獨り。最早尋ぬる者はなし。如何吾身を致

さんと。天には仰ぎ地に伏て。なげく心の哀れさよ。最早や便るは國許に。殘り居ります姉ばかり。早く歸りて此由を。姉上樣に傳へんと。年は十四の幼な子が。西の筑紫に歸らんと。歩みもならぬ石童は。五里や六里で宿をとり。漸々歸國して見れば。

哀れなるかな姉上は。無常の風にさそわれて。はや四十九日の法事なり。石童は早く姉上に。一什始終を語らんと。勇み歸れば此仕末。聞て其場に打倒れ。親せき縁者がありし共。昔の歌に有る如く。落ぶれて袖に涙の掛る時。人の心の奥ぞ知るゝと。

加藤を名のる石童も。一度ならず二度ならず。姉上かけて三度まで。いかに子供であり乍ら。無事を感じて發心し。石童心に思ふ樣。誰を便らん人もなし。高野へ登りし其時に。憐み受けし御出家樣。心のせいか何となく。父上樣と思われて。よし父上

様でなき迚も。親切深き御僧に。譯を語りし事なれば。御弟子にして被下と。便にするは御出家様。再び高野へ登り行き。今は苅萱道心の。庵家の口に立寄りて。御僧御願ひ申ます。聞に苅萱道心は。佛の教に背かれず。思ひ心を鬼にして。一度は石童を

返しけり。其後忘るに忘られず。子煩悩になやまされ。現となく夢となく。石童の事が思れて。成らぬ所へ聲を聞き。現在親の道心は。飛立程に思へども。体よく心を押し沈め。其方は今又參りしか。此方へ上り寛りと。話は殘らずするがよい。石童丸は

嬉びて。實は御僧に別れてより。麓へ下れば母上は。持病の癪に惱され。其上石童に憧れ死。詮なく國へ歸るれば。便りに思ふ姉上樣。今は此世に在されず。如何なる罪か此身ほど。思へば積る不幸福。今は賴る人もなく。思ひ出したは御出家樣。必ず救

けて給はると。是迄登りて參りしよ。御僧何卒慈悲を持ち。御弟子に成し玉われと。袖に縋りて賴み入る。聞きし苅萱道心は。共に涙に暮にけり。其方がそう言ふ譯なれば。直ちに弟子に爲玉ふ。必ず心配せぬがよい。御情深ひ御言葉。石童丸は喜びて。

苅萱道心の御弟子となり。其後互に親と子が。師匠よ弟子よと名乗のみ。苅萱道心は石童丸を。弟子に連れ高野山を立ち。諸國を巡り巡りて。御出なさる所は信濃國。此所に住所を定められ。終に親子を名乗らずに。目出度一生を終られました。

今に信濃國は。川中島の善光寺に。石童寺と其名を殘す。親子地藏の御物語り

南無親子地藏尊
南無親子地藏尊

をんあぼきやべいろしやのうまかぼ

だらまにはんどまじんばらはらばり
たやうん
南無大師遍照金剛
南無大師遍照金剛

大正十四年十一月二十日再版印刷
大正十四年十一月廿五日再版發行
（石童丸一代記和讃）（かるかや）

不許複製

著作兼發行人　淺野伊勢吉　徳島縣阿波郡八幡町大字切幡百七十三番屋敷
印刷人　淺野伊勢吉　徳島縣阿波郡八幡町大字切幡百七十三番屋敷
大販賣所　淺野伊勢吉本店

終